

令和6年度作品集

平和 コンクール



第24回平和絵画コンクール最優秀賞 釧路市立愛国小学校3年 柴田 千星 さん

釧路市平和都市推進委員会

＜ 目 次 ＞

【第24回平和絵画コンクール】

最優秀賞	愛国小学校3年	柴田千星	1
優秀賞	美原小学校4年	田口凜	
優秀賞	鳥取西小学校2年	村上すみれ	2
優秀賞	鳥取西小学校3年	小澤未侑	
優秀賞	愛国小学校2年	細野源太	3
佳作	愛国小学校6年	細野陽菜子	
佳作	中央小学校1年	葛西音巴	4
佳作	釧路小学校4年	三宅美沙希	
佳作	北海道教育大学附属 釧路義務教育学校5年	佐々木椿紗	5
佳作	鳥取小学校4年	安達雫	
佳作	阿寒湖義務教育学校5年	石川菜々穂	6
佳作	美原小学校4年	高橋美帆	

【第37回平和図書読書感想文コンクール】

最優秀賞	北海道教育大学附属 釧路義務教育学校9年	澤谷彩	戦争の終り	7
優秀賞	北海道教育大学附属 釧路義務教育学校9年	山本愛実	戦争をワタシゴトとして考える	9
優秀賞	景雲中学校1年	黒滝琴音	戦争の悲劇を繰り返さないために	11
優秀賞	桜が丘中学校3年	佐藤柚音	「黒い雨」を読んで	13
佳作	北海道教育大学附属 釧路義務教育学校9年	我満芽生	ワタシゴト	15
佳作	景雲中学校2年	梅上結心	今ある幸せに感謝して	17
佳作	景雲中学校2年	大谷百音	五つの記憶	19
佳作	北海道教育大学附属 釧路義務教育学校9年	松枝賢優	平和を守る	21
佳作	北海道教育大学附属 釧路義務教育学校9年	佐々木心優	「平和のバトン」を読んで	22
佳作	桜が丘中学校2年	渡邊玲愛	「白い町ヒロシマ」を読んで	24

【第23回平和の主張コンクール】

最優秀賞	釧路湖陵高校1年	青戸愛唯	祈り続けること	26
優秀賞	釧路湖陵高校2年	眞野ことね	語り継ごう、広げよう	28
優秀賞	釧路北陽高校3年	若杉恭佑	世界平和に少しでも近づく方法	30
優秀賞	釧路北陽高校3年	藤井咲空	感じたことのない恐怖	32
佳作	釧路北陽高校3年	小矢部雅也	被爆国として	34
佳作	釧路北陽高校3年	村山颯	自分のあたりまえはあたりまえじゃない	36
佳作	釧路北陽高校3年	永谷優奈	戦争と平和	37
佳作	釧路北陽高校3年	浅野翔大	平和と自覚	38
佳作	釧路北陽高校3年	新川康太朗	「平和」のカタチ	39
佳作	釧路北陽高校3年	宗像春輝	戦争と平和	41
佳作	釧路北陽高校3年	松本夢歩	世界が平和になるために	42
佳作	釧路北陽高校3年	中島大希	平和な今を生きる私達	43



第24回平和絵画コンクール

最優秀賞（釧路市平和都市推進委員会委員長賞）愛国小学校3年 ^{しばた} 柴田 ^{ちほし} 千星



第24回平和絵画コンクール

優秀賞（釧路市議会議長賞）美原小学校4年 ^{たぐち} 田口 ^{りん} 凜



第24回平和絵画コンクール

優秀賞（釧路市教育委員会教育長賞）鳥取西小学校2年 ^{むらかみ} 村上 すみれ



第24回平和絵画コンクール

優秀賞（釧路青年会議所理事長賞）鳥取西小学校3年 ^{おざわ みゆ} 小澤 未侑



第24回平和絵画コンクール

優秀賞（釧路ユネスコ協会会長賞） 愛国小学校2年 ほその げんた 細野 源太



第24回平和絵画コンクール

佳作 愛国小学校6年 ほその ひなこ 細野 陽菜子



第24回平和絵画コンクール

佳作 中央小学校1年 葛西^{かさい} 音巴^{おと は}



第24回平和絵画コンクール

佳作 釧路小学校4年 三宅^{みやけ} 美沙希^{みさき}



第24回平和絵画コンクール

佳作 附属釧路義務教育学校5年 佐々木 椿紗



第24回平和絵画コンクール

佳作 鳥取小学校4年 安達 しずく



第24回平和絵画コンクール

佳作 阿寒湖義務教育学校5年 いしかわ ななほ 石川 菜々穂



第24回平和絵画コンクール

佳作 美原小学校4年 たかはし みほ 高橋 美帆

第37回平和図書読書感想文コンクール

最優秀賞（釧路市平和都市推進委員会委員長賞）

戦争の終り

北海道教育大学附属釧路義務教育学校 9年 さわや あや 澤谷 彩

私はこの本を読んで思った。まだ戦ってる人はいると。

私が読んだ本は井伏鱒二の「黒い雨」という本だ。この本にした理由は作者が同じ「山椒魚」という本を読んで面白く他の名作も読んでみたくなったからだ。

あらすじは、主人公閑間重松の姪の矢須子の縁談が八月九日に被爆した原爆患者ではないかという噂があり決まらないという話から始まり、重松は矢須子の身体が健康であることを見合い相手に証明するために当時のことを記録した日記の清書を始めてゆくという話だ。日記の清書をする現在と日記の中の過去を行き来する形になっている。

黒い雨とは原爆の投下後に降る、爆発時に舞い上がった泥、すす、ほこり、放射性物質を含んだ粘り気のある大粒の雨のことである。小説内でも矢須子が黒い雨に打たれ水で洗っても落ちない描写がある。この雨は原爆の二次被害のようなもので喉の渇きから雨を口にしたり、雨に打たれ数日は元気に過ごせていたにもかかわらず、突然死亡する人も多かったそうだ。

私がこの本を読んで感じたことは二つある。一つ目は何もわからないことの怖さ。二つ目は戦争に終わりはないということ。

一つ目に感じたことの理由は広島の人々が原爆のことを「ピカドン」と呼んでいたからだ。ピカドンという名前は先にピカと光り、後にドーンという轟音が聞こえるからだろう。他にも日記の中で主人公は「人間の目をつぶす有毒爆弾」ではないかと判断していた。自分がそのものについて何も知らないと様々な予測を立ててしまう。身体に有毒なものではないか、周りの空気も有毒になるのではないか、人を媒介して感染するのではないかと。近年、新しい感染症の新型コロナウイルスが世界的に流行ったが、そのときもある食べ物を食べると感染しなくなるなどという噂が流れ様々なお店からその食べ物がなくなってしまったこともあった。噂が多数の人がそう発言しているだけで私たちも簡単に信じてしまう。発言する側も受け取る側も気をつけなくてはならない。この本でも矢須子が原爆患者だといい、重松夫妻が秘し隠しているという話が出ているが全くの噂である。

二つ目の戦争に終わりはないと感じたのは物語に出てくる様々な人物が原爆による後遺症に苦しんでいる描写があったからである。戦争を始めることは簡単かもしれないが戦争を終わらすことは簡単ではない。戦争が終わって安心するかもしれないが、戦争

で犠牲になった人々、後遺症を患った人々に対する悲慘な気持ちで立ち直れないでいた人もいたかもしれない。広島を中心的な街も被爆を受けて復旧するのにたくさんの年月がかかったことだろう。他にも様々な被害があったと思われるが、今も戦争で苦しんでいる人がいるという事実は変わらない。

私はこの本を読んでいる途中で読むのをやめてしまいたくなる時があった。それは原爆が投下されて直後の場面で生々しく、鮮明に書かれていたからである。投下された後、人々がどのような格好をしていたのか、どのような精神状態にあったのか、建物はどうなっていたのか。正直、今の私たちの生活からでは考えられないような風景だったにちがいない。しかし、そのようなことが実際に起こったのだ。このような想像を絶する場面の中で特に印象に残ったのは重松、妻、矢須子が駅に辿りつき動いている満員電車に割り込んで入ったとき、重松は狭苦しかったので鼻の先にある婦人の荷物を肩でおし、違和感を感じ手で触ってみると人間の耳だった。重松は婦人に「お子さんですか」と尋ねると「そうです。死んでいるのです。」と答え重松はおしたことを謝り婦人は「お互いさまです」と答え俯いたと思うと発作を起こしたように泣き出した場面だ。この場面は物語としてはそこまで重要な場面ではないが私には印象に残った。このような戦争で無罪な無関係な市民が、しかも未来のある数多くの子供達も亡くなっている。広島の前爆投下で亡くなった人は約十四万人、その中で九歳までの子供は約七万人だそう。約半分が子供で私はこの情報を知ったとき心が痛んだ。一つの原子爆弾で何万人という人の命を奪えることも知った。

私はこの本を読む前、原爆について詳しいことは何も知らなかった。しかし、この本を読んで原爆の恐ろしさについて知ることができた。そして目を背いてはいけない悲劇であることも知った。さらに原爆による後遺で苦しんでいる人がある。戦っている人はまだたくさんいる。原爆の被害について知るだけでも私はその人たちの力になれると信じている。世界で唯一、原子爆弾の被爆国に生まれた私たちはこのようなことが二度と起きないように忘れないことが私たちには大事なのではないかな。

書 名：「黒い雨」（著 者：井伏 鱒二）

第37回平和図書読書感想文コンクール
優秀賞（釧路市議会議長賞）

戦争をワタシゴトとして考える

北海道教育大学附属釧路義務教育学校 9年 ^{やまもと}山本 ^{まなみ}愛実

今、世界では戦争や紛争が各地で起こっています。日本では現在はそのようなことは起こっていないですが、昔はたくさんの国と戦争をしていました。その戦争の歴史の中で私が特に悲惨と感じたのは、広島・長崎への原子爆弾の投下です。原爆は、一瞬で何万人もの命を奪いました。

私が今回読んだ本は、中澤晶子さんの「ワタシゴト 十四歳のひろしま」という本です。この「ワタシゴト」というタイトルは、記憶を手渡すことを意味する「渡し事」と、他人のことではない、私のことを意味する「私事」のダブルミーニングで、作者の造語です。この本は、五つの物語からなる短編集になっています。広島原爆資料館に訪れた同じ中学校の五人の生徒について書かれています。ある生徒は、原爆資料館に展示されている弁当箱について、またある生徒はくつについてなど、七十五年前の顔も名前も知らない持ち主と自分とを重ね合わせのお話です。

五つのお話のうちの二つ目、「ワンピース」というお話は、みさきという女の子が主人公です。みさきたちは修学旅行で広島に行くことになりました。原爆資料館で焦げて血のしみがついたワンピースを見ます。それを見て、そのワンピースととても似ている、小学一年生の時にお母さんに縫ってもらったけれど、一度も着なかったワンピースを思い出します。資料館を見学している最中、どこからか声が聞こえてきました。みさきにしか聞こえない声です。みさきはきらい、と言ってワンピースを一度も着ませんでした。一方その声の主は、みさきと同じようにお母さんに縫ってもらったワンピースを、うれしい、とおばあちゃんのお見舞いに着て行き、日傘をくるくる回しながら喜んだと言いましたが、そこで話は途切れ、声は聞こえなくなりました。その人はその後どうなったのか。みさきは、その人はどんな人だったのか思いをはせます。

この本を読んで、戦争について他人事として考えるのではなく、本の題名にもあるように「私事」として考えて未来に伝えることが大事だと感じました。この本に登場する人物たちも、五人それぞれ原爆資料館の展示物を見て自分と重ね合わせ、戦争や原爆について考えていました。

私も二〇一八年の夏、家族で広島を訪れて、原爆資料館や平和記念公園、原爆ドームなどを見てきた経験があります。他の場所とは違う空気が流れていたように感じま

した。かなり前のことなので、詳しくは覚えていないのですが、原爆の威力や悲惨さを感じたのは覚えています。被爆者の数を数字で表すのは簡単ですが、その一人一人に色々な人生や命がありました。資料館に展示されている全てのものにちゃんと持ち主がいて、大切に使われていました。あの声の主が喜んで着ていたワンピースもその一つです。ですが、原爆によって持ち主を失ってしまいました。そんなものたちを見ているとすごく悲しく、切ない気持ちになりました。

原爆が落とされたのは七十五年も前のことですが、その七十五年間苦しい思いをしている人や悲しい気持ちをしている人がいます。心の痛みはどんなに時間がたっても消えることはありません。

日本は広島と長崎に原子爆弾を落とされた、世界唯一の被爆国です。もう二度と同じような歴史を繰り返してはいけないし、これからもこの悲惨な歴史を語り続けていく必要があると考えています。早く戦争や紛争などが無い平和な世界になってほしいです。

書 名：「ワタシゴト 14歳のひろしま」（著 者：中澤 晶子）

第37回平和図書読書感想文コンクール
優秀賞（釧路市教育委員会教育長賞）

戦争の悲劇を繰り返さないために

釧路市立景雲中学校 1年 黒滝^{くろたき} 琴音^{ことね}

みなさんは知っていますか？戦争に巻き込まれた人々の悲劇を。

みなさんは知っていますか？原爆を落とされた広島や長崎の悲劇を。

戦争が終わって、今年で七十九年。戦争を体験した方々、被爆された方々の高齢化が進み、原爆を伝える活動が困難になってきたことがニュースになっていた。令和五年の時点で、被爆者の平均年齢は八十五歳を超えているそう。今、伝えられる人が少なくなっているからこそ、私たちが当時のことをよく知り、次の世代に受け継いでいかなければならない。

そう考え、「ぼくは満員電車で原爆を浴びた」を手にとって読んでみた。この本は、一九四五年に広島で被爆した米澤鐵志さんが少年の頃に経験した実話であり、被爆後すぐの広島で起こったことを記したものだ。当時、米澤さんは地方に疎開していたのだが、帰れる場所が見つかり、地元に戻ることができた。しかし、生活必需品が不足し、広島に買い出しに出たときに被爆してしまった。奇跡的に命を失うことはなかったが、そこで見た風景は地獄のようだった。

「水をくれ」

「水をくれ」

あっちでもこっちでも、うめくような声で、言っている。

川につかってそのまま水面に口をつけて飲む人もいれば、手ですくって飲む人もいた。その人たちを見ていて、ぼくはぎょうてんした。水を飲んだ人たちが、飲むと同時にたおれて、流されていくのだ。なんなんだ、と思っていると、

「飲んだらあかん」

「敵が川に毒を流しとるんだ。飲むな」

という声があちこちから聞こえてきた。ぼくも母も、歯をくいしばって飲むのをがまんした。

本の中にあった記述の中で、わたしが一番ぎょつとした場面だ。原爆が投下されると。爆心地の地表温度は三千～四千度にも達したそう。体を焼かれ苦しむ人々が水を飲んだとたん死んでいく。何の罪もない人たちが一瞬にして殺されてしまったの

だ。これが本当にあったことだと思うと、悲しくなるし、もう二度と起きてほしくない。だが、米澤さんが苦しかったのは、これだけではなかった。トラックや列車を乗りつぎ、もといいた場所に戻ったが、米澤さんもお母さんも放射能の後遺症を発症してしまった。被爆したお母さんのお乳を飲んだ一番下の妹が死に、お母さんも死んでしまった。二か月後には学校に通えるようになったが、放射能の影響で髪が抜け、米澤さんはいじめられ、苦しい生活が続いたそうだ。原爆は、放射能でも人々の生活を狂わせてしまうのだ。

私は米澤さんのように自分だけが生き残り、家族がみんな死んでしまったら生きていくことはできないと思う。悔しいし、悲しいし、腹が立つ。そんな経験を米澤さんはしたのだと思う。けれど、今生きていて、思い出したくもないことを必死に思い出し、次の世代に伝えようとしているのだと思う。それはすごいことで、米澤さんが言っていた「少しでも多くの人々に『核』と『戦争』について考えていただければ」という願いはいつかかなってほしいと思う。

だが、今この瞬間も、世界では戦争がいくつも起こっている。ロシアとウクライナの争い、カザフスタンでの争いはニュースなどで報道されているが、インターネットで調べてみるとまだまだたくさんの戦争が繰り広げられていることが分かる。宗教の違い、民族や文化の違い、政権への不満、領土・資源の奪い合いなどで、戦争が繰り返されているのだが、そんな理由で人の命が失われていくのは大きな間違いだ。私は、もうあの時のことが起きてほしくないと強く思う。あの時とは、原爆が投下された広島や長崎のことだ。たくさんの人が一瞬にして命を落とし、関係のない人たちまで死んでしまった。私たちにできることは、この悲惨な体験をしっかりと受け継ぎ、二度と繰り返されないようにしていくことだと思う。

書 名：「ぼくは満員電車で原爆を浴びた 11 歳の少年が生きぬいたヒロシマ」（著者：由井 りょう子）

第37回平和図書読書感想文コンクール
優秀賞（連合北海道釧路地区連合会会長賞）

「黒い雨」を読んで

釧路市立桜が丘中学校 3年 佐藤 柚音^{さとう ゆずね}

私たちにとって当たり前の日常、家族と過ごしたり、友達と遊んだり、勉強をしたり、食べたいものが食べられたり、家で眠ることができたり、テレビを見られたりできる。このように暮らすことは私たちにとって当たり前に存在する。これらは日本では当然のことではないだろうか。私は「黒い雨」を読むまでそう信じて疑わなかった。

「黒い雨」は学校の本棚にあり、黒いという言葉と雨という言葉を組み合わせてただで戦争が頭に浮かぶなと思い、手に取った。

この話は広島市への原子爆弾投下後だ。閑間とシゲ子の夫婦は戦時中広島市内で被爆しその後遺症で重労働ができない。養生のため散歩や魚釣りをすれば、口さがない村人から怠け者扱いされる。やるかたない重松は、村在住の被爆者仲間を説得し、鯉の養殖を始めようとする。一方で同居する姪・矢須子の破断が繰り返されており頭を悩ましていた。そんな折、矢須子にまたとない良い縁談が持ち上がる。この話をぜひともまとめた重松は彼女に健康診断を受けさせた上、昭和二〇年八月当時の自身の日記を取り出して清書しようとする。矢須子が原爆炸裂時、広島市内とは別の場所にいた=被爆者ではないことを証明するためだった。しかし実際には、矢須子は重松夫婦の安否を確かめるため船で広島市に向かう途中、瀬戸内海上で黒い雨を浴びていた。しかも再会した重松らと燃え上がる広島市内を逃げ回ったため、結果として残留放射能も浴びていた。この事実を重松が書くべきか悩んでいる折、矢須子は原爆症を発病。むなしく症状は悪化し、縁談も破談になってしまう。昭和二〇年八月十五日までの日記を清書し終えた重松は、空に向かい矢須子の冥福を祈るという話である。想像もできないような恐ろしい状況下で生きていく矢須子の姿にいつの間にか引き込まれていった。

私たちは普段の生活で自分の命を心配したり、大切な家族や友達を失うようなことは滅多にない。平和が当たり前になっている今の日本が七五年前には戦争をしていたとは想像もできない。しかし、数年間の戦争中に日本人だけで三一〇万人もの尊い命が犠牲になっている。今こうして生きていることをとても幸せだと感じられる。あんな体験をしたら、次に死ぬのは誰なのか、目の前のあの人だろうか、それとも自分だろうかと不安の連続だったに違いない。戦争中は多くの人がこんな不安の中生きてい

かなくてはならないのだろう。今も世界のどこかで戦争が行われていることを考えるととても恐ろしくなる。何も悪いことをしていない人が次々殺されていく。誰が戦争を続けさせようとしているのだろうか。戦争はいつ終わるか分からない。私たちの日常ではすぐに明日が何事もなくやってくる。でも戦火の中の人たちには明日がくるとは限らない。きたとしても不安と恐怖が続くのだ。戦争は何のために行われているのだろう？勝つことが目的なのだろうか？国同士の争いで犠牲になるのは戦争を始めた人ではない。戦争をせずに世界を変えてきた偉人がある。言葉で世界を変えることができる。それを彼らは教えてくれている。

「今、もし、向こうの山に虹が出たら奇蹟が起る。白い虹ではなく、五彩の虹が出たら矢須子の病気が治るんだ。」この言葉がどれほどの思いから出ていることか。どれほど深い愛情から出た祈りであることか。全てが非常に美しい話だ。人のために生きる人間の美しさが描かれている。黒い雨を浴びたことがわかって矢須子の縁談が壊れた時に、本気で怒る。そして「自分達とは違うんだ。」と言う。その心が美しい。叔父夫婦が自分のことを思ってくれているのを感じ、深い感謝を抱いている。だから自分が原爆症であることに気付いても必死にそれを隠す。どれほど悲しむか知っているから。また、黒い雨が悪くないと叫んだ叔父の心が大事だから。互いに思い遣り、大事に思う。正直に病気を言えればいいじゃないかと。そういう意見は正しい。でも心によってそうしない人間はもっと美しい。

私は「黒い雨」を読んで、戦争のない世界を築き上げたいと思うようになった。それは誰かに頼るのではなく、自分で戦争についての本や、体験した方々の体験談から学んで、自分の言葉で伝えていこうと思う。

書 名：「黒い雨」（著 者：井伏 鱒二）

第37回平和図書読書感想文コンクール
佳作

ワタシゴト

北海道教育大学附属釧路義務教育学校 9年 我満 芽生

昭和二十年八月六日。この日が世の中の残酷さを伝えている。私は「ワタシゴト」という本を読み、戦争について学んだ。

筆者は中澤晶子さん。中澤さんは、長年原爆ドームなどに訪れた修学旅行生の案内をしていた人であった。中澤さんが修学旅行に何を感じたかを聞き取り、それを本にしたのである。「ワタシゴト」は中澤さんの造語で、記憶を手渡す「渡し事」と、他人のことではない「私事」の意味が込められている。

主人公は横浜の中学生たちで、舞台は原爆資料館。修学旅行生は、しっかりと事前学習したものをその展示資料として見学していく。つま先のゴムが溶けた靴、背中 of 生地が裂けたワンピースなど、同じ年頃だった少年少女の遺品に向き合う話で、事前学習と実際の見学というものを通じて、あの一瞬に奪われた未来を向け止める。

この本は現代の中学生の悩みや迷い、葛藤を軸に展開するところが魅力的である。

特に印象に残った場面は、「ごめんない」の部である。そこで出てくる八八歳のおばあさんは、原爆で同じ学校だった先生と生徒合わせて六百七十六人を失っている。修学旅行生のあかりは、五歳の時に大地震と大津波を経験した。橋の上で友達と手をはなしてしまい、その友達が川に流されてしまったのである。あかりは、その日のことを誰にも、両親や兄弟にさえ言えないまま都会で大きくなった。そのことと、おばあさんの経験がリンクして、あかりの誰にも言えなかった気持ちをほぐしていくという場面が印象的だった。

焦げたお弁当箱や、真っ黒なワンピースなど話の中でたくさん出てきたが、一瞬の出来事がどれだけ悲しい瞬間だったのか、どれだけ熱かったのか。たくさんの疑問が思い浮かぶ。

原爆ドームに飾られている作品をみて、具合が悪くなった人、もうこの先は進みたくないと言った人などがいたが、私はその人たちにとても賛成する。私は小学校三年生の頃に原爆ドームを訪れた。その時の私は、戦争とは何かを全く知らず、社会の授業もまだなかったため何も分からず、そこは謎の空間であった。ただ、覚えていることは、何もかもボロボロだったこと。たったそれだけだ。もし今、戦争についてたくさん知り、この本を読んだ上で原爆資料館・原爆ドームを訪れたなら、この本の修学旅行生たちのように、当時の残酷さに怯えて、動けないだろう。

「平和」が当たり前であるとは思ってはいけない。今生きていられることに感謝しなければならない。過酷な戦争をしてまで日本を守ってくださった方々に感謝しなければならない。そして、戦争の悲惨さを後世に伝えていくことが私たちの重要な役割であると思う。二度と戦争をくり返してはならないことを言い続けることが、なによりも平和への近道だと思う。

人間はこれまで色々な争いをしてきた。その結果、得たものはいったい何だったのでしょうか。私たちはこれからも、平和とは何かということを追い求めていかなければならない。

この本を読んでさまざまなことに気付かされた。人間一人一人の意思が尊重され、互いに認め合える世の中にしていきたいと感じた。その一瞬は、ワタシゴト。

書 名：「ワタシゴト」（著 者：中澤 晶子）

第37回平和図書読書感想文コンクール
佳作

今ある幸せに感謝して

釧路市立景雲中学校 2年 梅上^{うめかみ} 結心^{ゆい}

「赤く焼けただれてふくれあがった屍の山。眼球や内臓のとび出した死体。黒焦げの満員電車。倒れた家の下敷きになり、生きながら焼かれた人々。髪を逆立て、ずるむけの皮膚をぶら下げた幽霊のような行列。人の世の出来事とは到底いえない無残な光景でした。」

とある被爆者が語った言葉だ。書き連ねられるその光景は、今の日本からは想像できないような恐ろしいもので、読後も私の頭に残り続けた。

あなたは広島・長崎の原爆投下について、どんなことを知っているのだろうか。原爆について、テレビや教科書を通してのみの知識だった私は、原爆を知るため「被爆者からあなたに」という本を読んだ。再び被爆者をつくらぬよう、原爆被害の実相を訴え続ける被爆者たちの思いが沢山綴られている。この本に書かれている多くの被爆者の言葉が、私の知らなかった原爆を物語っていた。

一九四五年の八月、日本に二度も原爆が投下された。爆発で生まれた火球は三〇〇〇度から五〇〇〇度となり、一瞬で多くの被害や死傷者を出した。直接被害を受けて亡くなった人もいれば、原爆の放射線に苦しみ続けて亡くなった人もいる。いつ自分が死んでしまうのか分からない状況は、極めて恐ろしかっただろう。

私にとって、この本で知った出来事は衝撃的なものだった。しかし、まだ私の知らない現実が沢山あること、それを実際に経験した人が大勢いるということは絶対忘れてはいけないうだろう。

これから先の未来、戦争の中で核兵器が使用されてしまうかもしれない。戦争は多くの被害や死傷者を出し、そう簡単に終わらないものだ。現在、核兵器を保持している国は十ヶ国ほどあるそう。科学技術の進歩した今だからこそ、もし核兵器が投下されてしまえば、広島・長崎の原爆投下を大幅に超える被害が出るに違いない。誰もがそんな未来を望んでいないだろう。私も当然その一人であり、戦争や核兵器がない世界になってほしいと思う。しかし、そう上手く行かないのが現実だ。今の私に出来ることは、支援団体への寄付や過去の戦争を伝えていくことだ。小さくても積み重ねることで、戦争のない未来に近づいていくだろう。

当たり前のように家族がいて、私の帰りを待っていてくれるのも、安全な環境で好きなだけ遊べるのも、私が何不自由なく毎日を過ごせているのは、実はとても価値のある

ことだと、この本を読んで気づけた。この本は、今の自分がどれだけ幸せなのかを改めて考えるきっかけになる本だ。

原爆が投下されたのは、今から七十九年前で、当時の被爆者は年々減ってきている。再びあのような被害を出さないよう、私たち一人一人が原爆の実態を知り、後世に伝えることが大切だ。今ある幸せに感謝して、これからも生きていきたい。

書 名：「被爆者からあなたに」（著 者：日本原水爆被害者団体協議会）

第37回平和図書読書感想文コンクール

佳作

五つの記憶

釧路市立景雲中学校 2年 おおたに もね 大谷 百音

「戦争記念碑」という言葉を聞いて、皆さんはどのような印象を受けるだろうか。様々な言葉のとらえ方ができると思うが、著者のキース・ロウは歴史認識や像に込められた思いについて、五つのカテゴリーに分けて紹介している。

一つ目は、「英雄」。記念碑の数や大きさ建設された場所によって、人の考えや偉大さが伝わってくるのが書かれていた。私は写真を見ただけで衝撃を受けた。「母なる祖国像」からは「覚悟」が伝わってきた。この大きな像を建てるにあたって何を思い、どのくらいの年月をかけたのか。「ロシアの誇り」を強く持っていたことを感じさせる記念碑であった。今でも、同じことが言えると思う。皆を守るヒーローは広くたたえられ、何らかの形で人々の中にとどまる。戦争の中でのヒーローとして、この像を残したのだと思った。

二つ目は、「犠牲者」。栄光に満ちた記念碑の陰で、犠牲となった者たちのために建てられた記念碑が紹介されている。戦いがあるということは、それによる犠牲者が生まれる。何をもって正義とするのか。しかし、この写真を見たとき、全てが暗い印象に包まれることはなかった。確かに命を思い知らされることもあるが、そこから立ち上がろうとする意志が感じられるからだ。尊い犠牲の上に、復興とこれからの未来についての深い思いが伝わってくるからだ。

三つ目は、「モンスター」。ここでは、「スターリン像」などの記念碑が紹介されている。彼らは自分にどれほどの自信があるのだろうか。周りをどれだけ魅了しようとも、何をしてもよい理由にはならない。人を殺してそれを正義、悪を倒した、と本当に言い切れるのだろうか。たくさんの人を殺したスターリンは、なぜ「像」になったのだろうか。このように感じるのは、その時の人々の価値観と、今の私たちの価値観のずれが生じてしまっているからだ。時間が経つほど、この像を建てた理由が見いだせなくなっている。悪がいつか滅びる、とは、時間の流れとともに周りとの価値観が合わなくなっていくことなのだと思う。

四つ目は、「破壊」。ここには、「原爆ドーム」と「平和祈念像」について書かれていた。今まで誰も見たことがない太陽のようなものが落ちてきて、ショックで立ち直れなかった日本がどのように復興の兆しを感じたか。時間が経つうちに、廃墟が意味を持つようになった。ほとんどの建物が爆風で飛んでしまったが、その中に残った「産業奨励館」

跡は、人々にとって奇跡的に復興のための一つの糧となった。その建物を「象徴」とするために試行錯誤を繰り返した。平和記念公園は、一端が資料館、もう一端が「原爆ドーム」、その間にアーチ型の慰霊碑を配置するという構造になっており、どの角度から見ても「原爆ドーム」が正面に見えるような配置になっている。日本がその時「こうしたい」と思った願望が、素直に表れているのだと感じた。この建物の撤去を望んでいた人もいた。過去として忘れたい、という思いもあったのだ。それでも永久の保存を政府と約束したときにはどれほどの思いが込められていたのか。この先の未来に光が見え始めた瞬間であったと思う。長崎も思いを込めて、「平和祈念像」を建てた。原爆を伝える形は違っても、後に残そうとする思いはとても立派だと思った。石板に刻まれた文字には、爆弾を落としたアメリカへの批判はなく、日本の未来を光り輝くものにしていくという内容になっている。現在の日本が平和を保つことができているのも一つ一つの小さな行動があったからだとは私は思った。

五つ目は、「再生」。ここでは記念碑以外の「世界のこれから」について記されている。例えば、国連安保理の会議場の壁画。ここにはコンクリートやスチールなど、新時代の素材が使われている。絵の下部は暗い色で武器が描かれているが、上部には、暗闇から助け出そうとしている人の姿が見られる。人種に関係なく踊る姿、窓を開ける人の姿に、今の課題と向き合う大切さを感じさせられた。

この本は、直接原爆とはつながらないかもしれないが、その時の世界の動きや戦後の様子を感じることができた。この五つは私たちの忘れかけていた大切なものを引き出してくれる。どれも平和を作るための基礎だ。私たちも、誰かが欠けてはだめなのだ。皆揃ってそれぞれの味を引き出す。かけがえのない存在だということを学ぶことができた。これからは、物事を様々な角度から見て考え、思いやりと少しの我慢を大切にしていこうと思った。身近なところから、世界の平和を願って。

書 名：「戦争記念碑は物語る」（著 者：キース・ロウ）

第37回平和図書読書感想文コンクール
佳作

平和を守る

北海道教育大学附属釧路義務教育学校 9年 ^{まつえだ}松枝 ^{たかひろ}賢優

日本は平和な国だということをよく聞く。でもそれは今の日本の話で、平和でない日本を生きた人もいる。

この本で、原爆を体験した人はこう語る。「原爆の痛み苦しみというのは決してその瞬間のことだけでない、その後の人生の痛み苦しみです。」私はこの文を読んで今までの自分の考えがどんなにあまいものだったかを思いしらされた。原爆というのは単なる爆弾ではなく、放射線をともなう。大量の放射線を浴びると人体の細胞が破壊されたり、変形させられたりして人を即死させる。生き残ったとしてもがんや白血病などの病気を引き起こすリスクを高める。発症すれば一生苦しみを抱え続けなければいけないことになる。被爆した時には大切な家族や友人が見るも無残な姿になり胸がはりさけそうな思いになり、その苦しみを乗り越えても一生解放されることのない別の苦しみを味わわなければいけない。この人達は何か悪いことをしたのだろうか。しかし原爆というものは残酷にも一瞬の間に命も、未来も、希望も、何もかも奪っていったのだ。

私たちはその恐ろしさを知ることができない。なぜならその苦しみを体験した人がもう二度と同じことが起こらないように平和の大切さを伝えてきてくれたからだ。しかし被爆者の高齢化が進むと共に平和の大切さを伝える人も少なくなっていき、平和に対して何のありがたみも感じなくなってしまうかもしれない。私はそれではいけないと思う。平和のありがたみを忘れてしまえばまたいつか同じような過ちを犯すかもしれないからだ。原爆や戦争を経験していない恵まれている世代だからこそ、平和のありがたみを知り、これからも日本が平和であり続けるために平和の大切さを伝えていかなければいけない。そして世界に向けてもそれを発信しなければいけない。それが原爆で亡くなった方への敬意であり、平和を伝えてきてくれた被爆者の方々にできる唯一の恩返しだから。

書 名：「原爆投下10秒の衝撃」（著 者：NHK広島「核・平和」プロジェクト）

第37回平和図書読書感想文コンクール

佳作

「平和のバトン」を読んで

北海道教育大学附属釧路義務教育学校 9年 佐々木 心優

私は今まで「戦争」や「原爆」を社会の授業で得た知識でしか知らなく、深く考えたこともありませんでした。それは私の家族や親戚に戦争に関わった人がいなく、戦争に対して怖いイメージがあったため進んで知ろうとしていなかったからです。そんな私にとって、この本は戦争という出来事をイメージから具体的にし、関係ないから知らなくて良いとはならない出来事だと感じるきっかけとなりました。そして戦争による多くの人への影響とおそろしさから、改めて戦争はあってはいけないものだという思いを強くさせました。

私はこの本を読んで、広島で「次世代と描く原爆の絵」プロジェクトが行われていることを知りました。そして私は高校生の思いに共感する部分がありました。本当にそんなに悲惨な出来事がこの日本で起こったことを信じがたいという気持ちと、平和ということとても大きなテーマに私はどのように向き合えば良いのかという思いです。

この本を読み始めて私が率直に思ったことは、原爆の規模が大きいということです。原子爆弾の威力は凄まじく、中国地方最大の都市であった広島市の約半数もの人々の命が失われてしまいました。その頃は残留放射線が知られていなかったため、家族を探しに来た人々や救援で来た人々が放射線を浴びてしまうことがありました。それは誰かのためを思って行動した人々なのにも関わらず、放射線によって苦しまなければならないという状況があったことはとても悲しい事実だと思いました。加えて当時は原爆によって家族を亡くしてしまう方もたくさんいて、自分だけでも辛いのに、当たり前には家族がいなくなることの辛さと、周りもそれを助けられる状態ではないということなど、本当に辛いことが積み重なっていたとわかります。

戦争や原爆は、被害にあった人たち一人一人が良いことをした、悪いことをしてしまったということに関係なく、爆心地やその周辺にいた人々、直接戦争に関わっていなかった一般の人々にも大きな影響を与えるものでした。また、原爆は一瞬の逃げる隙も与えずに爆発し、人々の体に大きな影響を与えるものでした。原爆が起きた当時の広島にいた人々にとって、原爆はとても衝撃的な光景だったと思います。現在、証言者となっている語り部の方々は、小さい頃に原爆を経験しています。その頃の記憶は大人になっても薄れることはなく、簡単な思いで人に話すことができないほどの恐怖です。私は原爆は体に傷を残すだけでなく、その人の心の中にもずっと傷を残すものだと思いました。

私がこの本を通じて感じたことは、自分が関わっていなければ関係ないのではなく、かつて実際に起こった原爆という出来事を自分なりの思いを受け止めること、証言者の方の思いを忘れずに自分が住んでいるまちや日本、世界の平和と向き合っていくとが大切だということです。「平和のバトン」では、そのような思いから実際に行動に移し、被爆者の方と向き合っただけで原爆の絵を完成させた高校生たちが描かれています。私は原爆について知ること、今の日本が平和で、家族と当たり前の日常を送ることができる尊さを知りました。そして平和をこれからも守っていくためにはどうしたらいいのか、現在も戦争や内戦を行っている国があることに対してどう考えるのか、一人一人が自分なりの考えを持つことが平和と向き合うことに繋がると思います。

私はどんな理由があっても、人と人が争うことは絶対にあってはいけないと思います。なぜなら争いからは後悔しか生まれなく、その後悔は悪い連鎖のきっかけとなってしまうからです。しかし、わかっているのに行動で示すことは難しいです。そのため、原爆という悲しい出来事と向き合うことで、自分が平和について考えるきっかけとすることが大切だと思いました。二度と原爆のような悲惨なことが起こらないよう、平和への一歩として原爆を事実として捉え、これからの時代にその思い、平和のバトンを繋げていきたいと思っています。

書 名：「平和のバトン」（著 者：弓狩 匡純）

第37回平和図書読書感想文コンクール
佳作

「白い町ヒロシマ」を読んで

釧路市立桜が丘中学校 2年 ^{わたなべ}渡邊 ^{れいな}玲愛

私が読んだ「白い町ヒロシマ」は筆者の木村靖子さんの幼少期の話だ。木村さんが体験したことがありのままに綴られている。時期は太平洋戦争中期から末期ごろ。彼女が体験した、疎開後の生活、家族の死、変わり果てた広島の様子が鮮明に書かれている。原爆が落とされた後、広島に帰ることができた木村さんの言葉が頭に残っている。母親の惨い死に対して、「うそでしょう。」「よくわからない。」「なんで?」。痛々しかった。文章越しに怖いと思ってしまった。幼すぎる彼女には、本当に理解できなかったと思う。どうして、何も悪いことをしていない母が死ななければいけなかったのか。彼女と同じように、原爆によって大切な人を奪われた人は大勢いる。落とした国のアメリカ合衆国だけが悪いわけではないけれど、日本が行ったことの代償にしては大きすぎる。ただの殺戮だ。一方的に人を殺しただけ。それから、当たり前のように終戦した。原爆の被害を受けた人は全く報われていない。そして、七十八年経った今でも後遺症を抱えて苦しんでいる人がいる。誰も得することはないし、喜ばない。

原爆が投下された時の広島を作中では「地獄」と表現されている。石に残った影、蒸された遺体、立ったまま動かない人々。その表現の通りだと思った。もし、被害を受けて生き残ったとしても、外傷や精神の被害が大きい。爆心地から1キロメートル以内では、表皮が炭化し、垂れ下がる閃光熱傷。5キロメートル以内では、急性放射線症が発症した。この症状の始まりは、嘔吐や食思不振。二週間後には、脱毛、点状出血、口腔喉頭病巣が生じる。さらに、自分だけが助かったという罪悪感からの心的外傷後ストレス障害、白血病がある。そして、胎内被曝による小頭症が特に印象的だった。これは、母親の胎内で被爆し、同年齢者より頭囲が二倍以上小さくなり、脳の発育遅延を伴う。一つの凶器で五十六万人もの人々を傷つけて殺した。その被害が次世代にまで及んでいる。被爆二世、被爆三世という言葉があるのもそのせいだ。受け継がれる必要のないもの。今は承認されているが、被爆二世や被爆三世の健康への影響、遺伝的な影響な影響はないとされていた。この事実を知ったとき、信じられなかった。直接原爆の被害を受けていなくても、被害を受けた人の血縁者なら影響を受けない可能性が全くないわけではない。そして、この考えが認められたのは、疑惑が出た5年後だった。なぜ、こんなに時間がかかったのかよくわからない。もしかしたらと疑って調べていたら、被害者の負担が少なからず、減っていたのかもしれない。未だに原爆の後遺症に苦しんでいる人

がいる。八十年たった今でも傷が癒えていない。そのことを知っていながらも、まだ原爆を保有している国がある。百発、千発も。一つの原因で沢山の人がいるのになぜ保有しているのか。理解することができない。もう必要ないものだと思う。そもそも原爆自体、存在して良いものじゃない。たくさんの方が傷ついた歴史が残されているのに、また同じことを繰り返すつもりなのか。私は、そこにどんな理由があっても納得することはできない。

私が原爆のことを知ることができたのは、教えてくれる人がいたからだ。これからは、広島・長崎で起こった悲劇を知らない人が増えていくと思う。一つの爆弾でたくさんの人の命が奪われた事実を忘れないように、語り継いで、また同じことを繰り返さないようにすることが大切だと思った。一人一人が平和に生きていくためには、自分の意見を持ち、お互いを尊重することができれば、争いが減っていくと思う。そして、自分達の保身のために人と人が殺し合うことのない世界になっていくことをただひたすらに願っている。

書 名：「白い町ヒロシマ」（著 者：木村 靖子）

第23回平和の主張コンクール

最優秀賞（釧路市平和都市推進委員会委員長賞）

祈り続けること

北海道釧路湖陵高等学校 1年 ^{あおと}青戸 ^{めい}愛唯

釧路栄町平和公園の噴水や緑は、普段、私たちの癒しの場所として親しまれています。けれども、そこは昭和二〇年七月十四・十五日の釧路空襲で犠牲となった百九十三名の方々を弔う場所でもあります。

この日は厳島神社のお祭りが開催される予定でしたが、早朝から空襲警報が鳴り響き、お祭りは中止に。逃げ込んだ防空壕の中にも、飛び交う戦闘機の音が聞こえてきて、戦闘銃が厚い壁を突き破り襲ってきたそうです。恐怖の日から一か月、終戦の玉音放送を聴き、日本の敗戦に多くの人が涙を流し、釧路に徴兵されていた海軍達は竹老園で『残念会』をした後、それぞれの故郷へ帰っていったと言います。

兵士達は、戦争が終わったことを本当に残念だと思っていたのでしょうか。たくさんの建物が消失し、焼け野原に変わり果てた現実を目の当たりにして、どのような明日を思い描いていたのでしょうか。当時は敵だった米軍の兵士でさえ、空襲や原爆の悲惨さに戦争後遺症を患った人が少なくないそうです。この戦いは、勝ち負けではなく、多くの人々の心に深い傷を与えるものだったのではないのでしょうか。

「我は死なり、世界の破壊者なり。」これは、『原爆の父』と呼ばれた物理学者・オッペンハイマーが残した言葉です。彼は生前、科学技術の発展を目的とし、原子爆弾を自らの手で開発しました。しかしながら、そうして開発された爆弾は、アメリカ大統領・トルーマンの指示により、長崎・広島に投下され、膨大な被害を及ぼしました。オッペンハイマーは、日本の惨状を知って初めて、自分の生み出した核兵器が恐ろしいものであったと後悔したと言います。

戦争体験者は年々高齢化していて、語り継がれる機会が減少。北海道の被爆者協会は来年の春に解散することが決まったということです。このままでは、近い将来、戦争が『過去のこと』と忘れ去られてしまいそうです。私たちは、戦争を歴史として捉えるのではなく、常に平和を願い、安心して暮らせる世界をつくる心がけをしていくべきだと感じます。空襲のあった日、原爆が投下された日、終戦記念日だけが、平和のことを考える日であってはいけないのだと思います。今、普通の暮らしができていること。家族がいて、帰る場所があること…。自分の周りにあるもの全て、当たり前ではないことを知る必要があります。

戦争は、悲しい歴史を生むだけです。戦うことは、互いの人生を壊し、運命を狂わせ、

心を蝕むだけだと思います。憎しみ合うのではなく支え合い、すべての人々が、核兵器ではなく「愛」を持てる世界であってほしいと祈り続けています。

第23回平和の主張コンクール

優秀賞（釧路市議会議長賞）

語り継ごう、広げよう

北海道釧路湖陵高等学校 2年 ^{まの}眞野 ことね

塹壕で戦う兵士。原子爆弾のきのこ雲。焦土と化した街…。教科書で見る写真は白黒でありながら、「悲惨」などの言葉では到底言い表すことのできない、当時の状況が伝わってくる。今現在は、戦争を経験した者も少なく、戦争は未知の存在と言えるかもしれない。しかし、祖父母や曾祖父母が経験していたり、現代にも戦争の遺産として戦いの跡が数多く残されていたりすることを考えると、戦争とは思いの外身近なものだと気づく。

ところで、我々の住む釧路市には、いくつかの戦争の遺産がある。今から遡ること七十九年前。一九四五年七月十四日、十五日にアメリカ軍の空襲があり、学校や漁船、工場、鉄道などが標的となった。釧路市のシンボルの一つである幣舞橋は、機関銃で上空から地上に向けて射撃する、機銃掃射を受けた。被害を受けた橋の側面の鉄板には、爆弾の貫通した痕が複数個残っており、今は釧路市立博物館に展示されている。十数ミリメートルの厚さの鉄板を射貫くという事実は、我々に当時の銃の猛威を示してくれている。それを、他人事であるかのように済ませてはならないだろう。今でもその鉄板が残されて展示されている理由は、市民である我々に過去を知ってほしいという願いが込められているからではないか。実物には、書物に綴られた文字とはまた違った説得力やリアルさが詰まっている。それらを伝えていくことが、今を生きる我々に課せられた役割だろう。

また、幣舞橋以外にも戦争の遺産が存在している。釧路市には、十二基のトーチカが自然の中に残っている。トーチカとは、防御戦闘の際に銃や大砲などの攻撃から火器を守るための物で、断崖に作られる。これらは先程の鉄板とは違い、次第に風化していき、消えてしまう可能性がある。つまり、我々が語りの継いでいくことがより一層求められる。そのために、我々若い世代が戦争について学び、考えを深めていくことがより大切になる。勿論、戦時中と今とでは、地位や名誉、幸福などの考え方の基になっているものや価値観は異なる。けれども、戦争という出来事があったということ、その甚大な被害を、日本人として知っておくべきだ。過去があってこそ今があるということを忘れてはならない。

加えて、戦争について学ぶことの他に、外交関係にも目を向ける必要があるだろう。外国との関係性について我々にできることは少なく、外交に直接的に繋がる行動はできないかもしれない。しかし、意識や行動することは今からでもできるだろう。私は、以

下の二つのことを意識したり実行したりすると良いと考える。

一つ目は、身近な人を日頃から大切にすることだ。例えば、明るい挨拶をしたり困っている人を助けたり、相手の価値観を否定しない心など、まず身近な人から始めると、徐々に広がりを見せるだろう。地球規模だと我々の手の届かない範囲もあるが、皆の意識や行動を少しずつ変えていくことは、十分手の届く範囲だと思う。

二つ目は、外国人差別をしないことだ。我々は無意識に一部の国に対して、自国を攻撃してきた国、寝返った国などのレッテルを貼ってしまっているかもしれない。しかし、一人一人は思いやりのある素敵な人間であるということを忘れてはいけない。現に、私が話したことのある外国人は皆、丁寧で優しい人達だった。先達の行動から、見えない壁を自ら作る必要はないのだ。

私は、これらが平和への第一歩なのではないかと考える。当たり前のように実は貴重な日常の有り難さを、感じながら生きていきたい。「平和だね」と言える日が、一日でも長く続くことを私は願っている。

参考：釧路市ホームページ 釧路市立博物館

NHK 北海道NEWS WEB

第23回平和の主張コンクール
優秀賞（釧路市教育委員会教育長賞）

世界平和に少しでも近づく方法

北海道釧路北陽高等学校 3年 ^{わかすぎ}若杉 ^{きょうすけ}恭佑

こんな言葉がある。「汝平和を欲さば、戦への備えをせよ」これは古代ローマの警句と言われている。今の言葉らしくするのであれば、「武力という抑止力があって初めて平和を保つことができる」のようなことだろうか。現代の世界でいう「抑止力」は核兵器がそれに当たるのだろう。2023年時点で核を持っているとされる国は、アメリカ、ロシア、フランス、イギリス、中国、インド、パキスタン、イスラエル、北朝鮮の9カ国だ。そして私たちの住む日本も作ろうと思えば作れてしまう力と技術を持っている。

では、こんなに核を持つ国、持てるかもしれない国が多くあるのなら世界はとっくに平和なのではないか。核がしっかりと「抑止力」としての役割を果たしきれているのではないのか。と思う人がいるかもしれない。私もそう思う人の1人であった。しかし悲しいことに、世界はそう上手くはできていなかったのだ。誰もが忘れないであろう2022年2月24日、核を持つ大国ロシアは隣国ウクライナへと侵攻した。現在も続く熾烈な戦いがかの国で繰り広げられている。翌年10月7日イスラエルとパレスチナのガザ地区を支配するハマスとの間でも戦闘が開始された。人類が未だかつて経験したことのない最新兵器が飛び交う戦場。降り注ぐミサイルの雨は人々を平等に蹂躪し、町や工場、畑や故郷は瓦礫の山と化した。ドローンの登場により戦車は動く鉄の棺桶同然だ。こんな地獄が産まれてしまった。確かに核は抑止力だが、それはにらみ合う国が両方核を持つ場合に限る話に過ぎず、核を持つ国が持たない国に攻めるならそんな抑止力なんて皆無。むしろ脅しの道具になり果ててしまうのだと私は考える。

結局の所、核なんて保有しても世界は平和になんてならない。それはアメリカとソ連の冷戦時代から何一つとして変わっていない。私の希望的観測だが、世界の有識者達も内心わかっているし、核を手放せるのならそうしたいと思っていると信じていたい。ならばどうやって本当の平和をもたらすことができるのか私個人の勝手な考えを述べていく。

最初にハッキリ言うと、100%の平和は全く不可能だと思っている。なぜなら人間には懐疑心と恐怖心が備わっているからだ。例えば、ある二ヶ国が同時に核を捨てましようとしたとする。一番てっとり早い解決策はこのような感じだろう。しかしいざ実行しようとしても互いに「相手国はウソをついていて、自国が捨てた瞬間に攻めてくるのでは？」という疑いが生じて、どちらも捨てられない状態になってしまう。「軍縮」という言葉が叫ばれているのにもかかわらず、実際にする国が少ないのは、このような心理が働いているからかもしれない。

100%の平和も無理、みんなで核を捨てることも難しいとなれば、完全な解決を目指すことも難しいと思うので、現状をまだ良い方向へと変えていく努力をして世界平和に少しでも近づく方法を考えなければならない。そこで重要な役割を担えるのが日本であると私は思う。日本は世界で唯一、核を実際に使われた国だ。だからこそ「抑止力」というふんわりとした印象ではなく本当に使われた時の被害やその悲惨さを生々しく語ることができる。世界が思うよりも核が遥かに恐ろしい物であると伝えることができるだろう。日本だからできることはたくさんあるはずだ。少し話したくらいでは世界は理解してくれないかもしれないが、それでも諦めてはいけない。

こんな言葉がある。「ローマは一日にしてならず」大きな事を成し遂げるには不断の努力が大切だ。戦争の恐ろしさを懸命に訴え続けていけば、いつの日か理解を示す国が現れ始め、世界平和の実現へと少しずつ近づいていけると私は信じている。

第23回平和の主張コンクール
優秀賞（釧路市連合町内会会長賞）

感じたことのない恐怖

北海道釧路北陽高等学校 3年 藤井 咲空

2022年、2月24日、ウクライナとロシアの間で戦争がはじまった。当時、テレビをつけるとどれも同じ報道だった。この目で実際に「戦争」というものを見た。それはとても残酷で、大人も子どもも関係なく攻撃され、大きな建物も崩れるなど見るに堪えない映像だった。地下鉄のホームへ避難している姿、服が破れている人、薄暗く不気味な空間など、見ているだけでとてつもなく恐怖を感じた。現地にいる人々はどのような気持ちなのか、考えるだけで悲しさや、戦争をはじめた者への怒りなどが湧いてくる。

様々な映像を見ていると、私は日本という国が本当に安全なのか。そして、日本と戦争の関わりとはどのようなものなのか気になっていた。第二次世界大戦では、日本はどのようなことをしていたのか。その時の国民の気持ちを調べてみようと思った。

まず初めに、第二次世界大戦時の日本について調べた。この時の日本は武力侵攻をしていた。行っていることは全て現在のロシアと一緒だ。この侵攻に対し、日本国民はどう思っていたのか、どのような暮らしをしていたのか。まずはネットで調べてみた。見つけたのは戦争を経験した方の記事。その方は当時10代で、今の私と近い歳だった。その方の一週間は今では信じられないほどの厳しい日々だった。だが、国民は皆、「お国のため」と言い、何も疑問に思っていなかったそう。日本は戦争色に染まり、批判をすれば捕まるという、今の日本では考えられない雰囲気だ。けれど本当にそうなのか。本当に皆戦争に賛成だったのか。人を殺すという行為をして良いと思ったのか。私は気になり母に聞いた。

母が話してくれた内容は、私の祖母が実際に戦争の時、何をしていたかということだった。祖母は朝鮮の捕虜として捕まってしまった人達へご飯を作っていた。出す量は少ないのに、重労働させられて、ひどいと思っていたらしい。祖母はご飯の盛る量を増やしたりと、見つかってしまえば怒られてしまうようなことをしていた。けれど私は、そんな祖母を知り、優しい人なんだと誇りに思った。ウクライナとロシアの戦争がはじまって2ヵ月ほどが過ぎた時、ロシア国内でもデモが起っていたりして、全員が戦争をするべきと思っている訳ではないのだと気付くことができた。

第二次世界大戦で戦争はしていけないものだとは心に決め、長い間その約束を守っていたのにも関わらず、それを破り、沢山の悲しみや恐怖をうみだしたロシアのウクライナ侵攻は許されるものではないと思う。今までの戦争の年月も長く、この戦争はまだまだ続

くのだろうか。2年という今までの戦争では短いと思う人がいるだろうが、それは間違いである。1日でも速く戦争が終わることを私は願っている。

第23回平和の主張コンクール

佳作

被爆国として

北海道釧路北陽高等学校 3年 おやべ まさや 小矢部 雅也

昨年、広島の被爆体験伝承者の方からのお話を聞く機会がありました。私は学校の授業で原爆について学んでいましたが、お話を聞く前と後では自分の考えが大きく変わりました。なぜかという、お話を聞く前では「一九四五年八月六日に広島に原爆が落ちてたくさんの人々が命を落とした。」という事実としか考えていませんでしたが、人目線で原爆について語られた時にとっても衝撃的で核爆弾がいかにおそろしいものなのかわかったからです。

その方の話では、被爆直後の広島の悲惨さについて語られました。原爆が広島の街へ落下した直後、中心部からすさまじい熱風と大量の放射線が広島を襲ったといえます。

当時十代という若さで軍の工場で労働していた女性は、その工場で被爆しました。空が一瞬光ったと思えばすさまじい強風が工場を襲い、建物も破壊しました。その女性は建物の下敷きとなりましたが、幸いにも自力で抜け出し、友達と家族を探しに行ったそうです。しかし、道中は自身のケガさえも忘れてしまうほど悲惨な状況でした。ガラスが全身に刺さり絶命している者、やけどによって皮ふがただれている者などがあふれかえっており、川は死体で埋めつくされて道には死体が山積みになっていました。奇跡的に父親と再会した女性でしたがまもなくして父親を失ってしまいます。それは原爆による放射線の影響でした。彼女が父親に再会した二週間後、父親は髪の毛が抜けはじめ、吐血や血便などの症状が出始めました。そして、亡くなったのです。また、彼女自身も何もなかったわけではありません。ただれた皮ふからはうじ虫が湧き、それを一本一本抜く作業は相当な苦行だったに違いないでしょう。

さて、今回被爆体験伝承者の方から聞いた女性の話でしたが、私はこの話を聞いて絶対に核兵器を廃絶しなければならない、と思いました。

現在、この世界の中から戦争はなくなっていない。最近でいえばパレスチナ・イスラエル戦争、ウクライナ戦争などが挙げられます。また、戦争以外でも隣国、北朝鮮のミサイル問題など核の脅威はなくなっていない。

ではもし今、どこかの国で核爆弾が使用されたらどうなるのでしょうか。当然、広島や長崎に落とされたものとは時間も経過しているため、当時のものとは比べものにならない程、威力も、被害範囲も格段に大きくなることが予想されます。そうなれば、あの日以上の悲惨さになることなど容易に想像できるでしょう。

我々日本は世界で唯一の被爆国として核兵器の廃絶を訴えていかなければなりません。

ん。核兵器は無差別に人を殺します。奇跡的に生き延びても後遺症に悩まされる人が大勢います。私たちは消極的ではなく、小さくても声をあげて、世界中から核兵器をなくせるよう訴えていくべきだと思いました。

第23回平和の主張コンクール

佳作

自分のあたりまえはあたりまえじゃない

北海道釧路北陽高等学校 3年 ^{むらやま}村山 ^{はやと}颯

私は、この「平和」ということは、学校に行ったり、友達と遊んだり、武力での争いが無い今のあたりまえの日常を過ごせているだけでも平和だと私は感じました。このことから私は今を世界というくくりで見たとき紛争や戦争が起きているため平和とはいえないと思いました。二〇二二年にあったロシアのウクライナ侵攻のときもその国の人々は戦争を反対していても国のトップに言われたら戦わなければならなかったり利益や価値を最大化にしようと紛争が至る所で起きていたり国同士の争いが世界全体ではなくならずにいます。そもそも私達日本国民の中でのようなあたりまえになっている日常を送れていない人が、他国には数えきれないくらいいることが今の現状です。人口の多いアジアで約3億人そして、発展途上の国があるアフリカでは2億人もの人々が飢餓問題でとても苦しめられています。その飢餓や貧困をなくそうと二〇一五年にSDGsが採択され世界で十七の目標が掲げられました。ですがコロナウイルスなどの流行もあったためか飢餓問題に悩まされる人は増加するばかりでなかなか減りません。発展途上の国への先進国からのボランティアや支援がとても重要になってくると思います。日本には食料も飲み物も基本的にあり、特に生活に困まったり生きていくのが難しいという状況はあまりないと思います。なので食料をボランティアであげたりなどで飢餓がなくなれば平和への一歩になると思います。そして私は、戦争や紛争がなくなることによって人々の命も守られその上貧困や飢餓問題に悩まされる人も減っていくと思いました。それぞれの多様性をお互いに理解し合って戦争をやめていくべきだと感じました。今、私達の中の生活があたりまえではないということを改めて自覚しなおし、世界では戦争や紛争が絶えず今も起きていて貧困や飢餓に悩まされてる人がいることを考えて自分達の中であたりまえになっているこの生活を平和だと思って過ごすことで幸せになれると思います。みんなが理解し合っていくことで平和になると思いました。

第23回平和の主張コンクール

佳作

戦争と平和

北海道釧路北陽高等学校 3年 ^{ながたに}永谷 ^{ゆな}優奈

みなさんは、「戦争」や「平和」について考えることはあるでしょうか。

「戦争」とは、国家間の争いを解決するための武力行使をすることです。

「平和」とは、戦争や災害などがなく、不安を感じないで生活出来る状態のことを指します。

日本は、過去の侵略によって、アジア近隣諸国に多くの被害を与え、自らも史上初の原爆被爆国としての悲惨な過去をもっています。こうした歴史への反省の所産として国民の間で広く受容され、平和と安全を国民に保障してきました。しかし、世界に目を向けてみるとどうでしょうか。いまだに戦争をしている国があります。

二〇二二年二月、ロシアはウクライナに軍事侵攻を始め、二〇二三年十月には、イスラエルとパレスチナのイスラム組織の紛争が中東の大国を巻き込んだ大きな衝突へと発展しました。ウクライナの戦争は、ロシア側が核ミサイルで脅して領土を占領しようとしていること、パレスチナの戦争は、戦争のきっかけとなるできごとが何千年前ということにとっても驚きました。

私は、戦争のない平和な日本で生まれて、今まで一度も命の危険を感じることなく生活してきました。だから戦争の怖さがわかりません。しかし、戦争は何の利益も生まないと思います。戦う兵士だけではなく、小さな子どもを含む一般市民も犠牲になっています。たくさんの人々が外国へ避難しています。輸出入をしている国にも迷惑がかかっています。私が美味しいご飯を食べている時や学校でめんどくさいと思いながら勉強している時などに世界には、常に身の危険を感じながら怯えてご飯も食べられず学校にも行けない人や国のために命懸けで国のために戦っている人がいます。ユニセフのCMに出てくるガリガリの赤ちゃんを見たりすると本当に心が痛くなります。こういう辛い思いをしている人がいない平和のない世界を望みます。しかし、戦争は戦争することを望む人がいなくなる限りなくならないと思います。

すべての人が平和に暮らすためには、国同士が協力し合う必要があると思います。私達ができることは、悲惨な過去のできごとを忘れないように後世にしっかりと伝えることです。伝えることによって戦争について知ってもらうきっかけになるとと思います。また、国同士が協力し合えるようにするためには何をしたらいいのか国民全員で考える時間も大切だと思いました。

第23回平和の主張コンクール

佳作

平和と自覚

北海道釧路北陽高等学校 3年 ^{あさの}浅野 ^{しょうだい}翔大

私は最近、国どうしの争いが増えてきているなとテレビやスマートフォンでのニュースを見ていて感じています。例えば二〇二二年から始まったロシア連邦によるウクライナ侵攻、二〇二三年から始まったパレスチナ、イスラエル戦争があります。

私はこれらの近々のニュースを見ると、ご飯を食べたり友達と話しているこの瞬間にも世界中で人を殺る行為が行われていたり逆に命を落とす人が多勢いると考えると恐怖を覚えると同時に何もできない自分に対する無力さや劣等感を感じてしまいます。自分はただ友達と遊んだりゲームをしたり学校に行ったりと気楽に生きているのに対し、世界では今を生きているのが精一杯な人達もいます。もしかしたら、いずれ日本でも争いが起こってしまうかもしれません。私たちはこの平和な日本という国で生まれ育ちました。しかしこれは悪いことでもあると思います。というのも、戦争が始まってすぐの頃はニュースは戦争一色の話題でした。ですが今はどうでしょう。戦争についてのニュースは今やっていますか。やってもせいぜい見出しの一つで十分やるかどうかだと思います。今や誰もがこの話題に関心がなくなっていると思います。私は今回の作文を機に私たちは平和の為に何ができるのかを考えてみました。辞書で「平和」の意味を調べてみると戦争や紛争がなく世の中がおだやかな状態にあること、心配やもめごとがなくおだやかなことと書かれています。戦争をなくすためには兵器ではなく、言葉での解決が一番だと思います。また、私たち個人ができることは、まず興味を持つことだと思います。なぜこのような争いが起こってしまったのかということを疑問を持つことで平和を認識することができます。

しかし、興味を持つだけでは平和にはなりません。興味を持ち調べたり持った意見を発信しないとなりません。そして友達でも親でも良いので考えを共有することが大事だと思います。この人はこういう考え方なんだな、こういう意見もあるんだなと思うだけでも戦争に対する意識が良くなるなと思います。

これからの時代を平和に生きていくためには私たち一人一人が生きているということとを自覚し世界に目を向けることが大切だと思います。

第23回平和の主張コンクール

佳作

「平和」のカタチ

北海道釧路北陽高等学校 3年 しんかわ 新川 こたろう 康太郎

日本は今年の8月15日に79回目の終戦記念日を迎えようとしている。毎年この日が訪れると私は「平和」という言葉が真っ先に思い浮かぶ。戦争の話題になるとほぼ必ずと言っていいほどセットで「平和」という言葉が出てくる。そこでこのどこかでありきたりな「平和」という言葉を私なりに考えた。

ウィキペディアによると平和とは、「戦争や暴力で社会が乱れていない状態のこと」も指すようだ。みなさんの現在の生活を想像してみてほしい。きっと多くの人の生活では暴力が振るわれていない、ましてや戦争に関しては起こるはずもない生活を送っているはずだ。しかし、これは日本国内に住んでいる私たちだからこそ言えることだと思う。世界に目を向けると二〇二二年から始まったロシアによるウクライナ侵攻、一九九八年イスラエル建国を発端に現在でも問題となっているパレスチナ問題などさまざまな争いが起きている。近頃の日本では一九四五年に終戦した第二次世界大戦を最後に戦争は起きていない。そこでみなさんに一度、考えてみてほしい。自分の生活と戦争を切り離して他人事のように考えてはいないだろうか。たしかに、私たちは戦争を経験しておらず全く想像できないものだろう。だからこそ自分事として考えてほしい。私たちはたまたま戦争のない場所、時代に生まれただけでたまたま「平和」に生きているだけなのかもしれない。この私たちが生きている日常こそが「平和」のカタチそのものではないだろうか。学校で友達と何気ない会話で笑いあったり、部活に本気で取り組んだり、家族と和気あいあいと話している時など普段の何気ない、自分の中で普通だと思っている事こそが本当の「平和」だと私は思う。人間だから争い事を百パーセントなくすことは無理なことではあっても互いが互いの良さを認めあえば減らす事は可能ではないだろうか。

最近、第二次世界大戦を舞台にした「ラーゲリより愛を込めて」という映画を見た。この映画は戦争が激化する中、突然主人公とその妻子が引き離され再会を誓うがシベリアで過酷な強制労働をさせられた末、生きて再会することが出来なかったというとても悲しい映画だ。日常から突然「平和」を奪われた悲しみ、悔しさ、憎しみを当時の人々は経験している。やはり他人事ではなく自分事として捉えて全てわからなくてもほんの少しでいいからその思いを理解すべきだと思う。そうすれば今起きている争いも起きようとしている争いも減らせるのではないのだろうか。

日常こそが「平和」のカタチ。そこら中に「平和」は転がっている。私の話を聞いて

全てを理解しなくてもほんの少しわかって、他人事ではなく自分事として考えてほしい。
いつか世界中が手を取りあって笑い合える日がくることを願って。

第23回平和の主張コンクール

佳作

戦争と平和

北海道釧路北陽高等学校 3年 むなかた 宗像 はるき 春輝

私は、平和のための戦争について考えてみました。私は、戦争がなくなると本当に平和が訪れるのかを疑問に思いました。そこで、大きく二つの疑問が関わっているような気がします。一つ目は紛争や内戦がなくなるのはなぜかということです。世界的に深刻な問題の1つとされているシリア内戦では、長年に渡る独裁政権への抵抗のための民主化運動がきっかけとされています。私はシリア内戦は良くも悪くも、平和のための出来事で間違いないと思っています。二つ目は、戦争がなくなったとしても、世界全ての人の平和にはならないのではないか、ということです。私は戦争を肯定する気はありませんし、戦争をなくすべきだと思います。しかし、戦争の根絶により数多くの命が救われたとしても、直接的に本人の幸せにはつながらない気がします。例えば、紛争や内戦、テロなどで、故郷を追われている難民は、戦争が終わったらもちろん故郷に戻るとは思いますが、戦争の終わり方次第では、もっと貧しくなったり、人と人との間を隔てたりする可能性があります。平和というのは、戦争がなくなることではなく、一人一人が幸せになることで、平和と呼ばれると思います。ですので、平和は戦争がなくなることにつながることはないと感じました。

ホセ・ムヒカさんのこの言葉を知っていますか。「私たちは発展するために生まれてきたわけではない。幸せになるために地球に生まれてきたのだ。」と、すばらしいスピーチを残しました。ムヒカさんが一番伝えなかったことは、人類が「他人よりも豊かになるために」を追い求め、人類は本当の幸せを見失ってしまいました。平和というのは、戦争がこの世からなくなることではなく、一人一人が家族や友人、他人を思う気持ちをもつことで平和に近づきます。この思いやりの輪を世界で広げていくべきです。そこで私たちはまず周りの人を思う気持ちを取り戻し、助け合っていきたいです。

第23回平和の主張コンクール
佳作

世界が平和になるために

北海道釧路北陽高等学校 3年 松本 夢歩^{まつもと ゆあ}

現在戦争、紛争が世界中で起きています。二〇二四年今でも6つの戦争、紛争が続いており、きっと私たちが知らない所でも起きているのだろうと思います。私たちが生まれる何年も前から、世界各地で戦争が起こり、その被害の壮絶さや、苦しい、悲しい思いをする人々が沢山いたことを経験してきたにも関わらず、そのことも忘れて今もなお悲しい出来事が起きていると思うと、私たちは何を学んできたのだろうと考えます。

日本は唯一の被爆国として、核の三原則であったり、憲法によって、戦争はしないと述べてから、戦争はしていません。領土問題においても、会談などで解決しようとしています。わたしは、この形が一番理想的かつ平和な手段であり、領土や人々にとって被害が出ない解決に向けた取り組み方だと思います。

戦争がどれだけ残酷で地獄のようなことなのか、経験していない私たちには想像もつきません。日々報じられるニュースで被害にあった街の様子を目にすることがあります。

行ったことも、見たこともない場所だったとしても、そこに住んでいた人たちの思いを考えると、とても辛く、早く終わってほしいと願います。

今では、子どもも兵士として参加させられているという記事を見ました。

洗脳に近い刷り込みなど、将来に悪影響だと思うし、その家族がどんな思いで子どもの帰りを待っているかなど、戦争、紛争を行っている人々にとっては分かり得ないことなのでしょう。

平和な日常がどれだけ幸せか。

家族との時間、友人との時間、あたりまえだった日が来ない、なんて想像もできないし、したくないと私は思います。

戦争はとても残酷です。経験していなくても分かります。なのになぜ戦争をするのでしょうか。

私は今の時代に戦争が起きてしまったことがとても残念に思います。

小さな行動一つを積み重ねて、平和を目指せるのなら、その行動をしようと私は改めて思いました。

まだ高校生だから、出来ることは少ないし、限られているけれど、その中で自分にやれることがあるのなら、まわりも巻き込んで、世界が戦争をやめて、平和な世の中になるように広めていきたいです。

第23回平和の主張コンクール

佳作

平和な今を生きる私達

北海道釧路北陽高等学校 3年 なかじま 中島 たいき 大希

日本が終戦してから約七十九年が経とうとしている今、戦争は絶え間なく起こっている。ウクライナとロシアの連合協定が原因で起こった戦争は今だに続いており、二年を経過しようとしている。更には、イランとイスラエルの関係も悪くなり戦争になりかねない状況にあっている。このようなことが起き続けている今、果たして平和が訪れるのだろうか。

そもそも「平和」とは何だろうと思ったときに、私は「戦争や紛争がなく、世の中が穏やかな状態にあること」だと思う。例えば私達が住む日本という国は、過去の歴史を遡ってみると国内外において深く戦争に関わりを持っていた。第一次世界大戦、第二次世界大戦など多くの戦争を行い、その度に犠牲者を何百、何千万人という膨大な数をだし、多くの爪痕を残してきた。中には、戦争を望んでいない人が多くいたと思う。「戦争をしてしまえば無駄死にするだけではないか」というふうに戦争を反対する人は必ずしもいたと思う。しかし、そのような思いを抱えながらも日本の平和のため、大切な人を守るために戦った人がいるから今の日本があるというふうに思う。今こうして、テレビやゲームなどを楽しむこと、友達と一緒に遊ぶこと、美味しいものを自由に楽しめることは当たり前の生活だと思いがちだが、この幸せな暮らしができるのは戦ってくれた人達がいたからこそである。そのため、感謝の気持ちを忘れずに生きるということが私達の役目だと思う。そして、他の国々では今も絶えない戦争があり、生きるために必死な人達がいる。その国の人達もいるということを自覚し、行動していくべきではないでしょうか。

このように、私達が楽しく過ごせているのは昔の人々が必死に戦ってくれたからである。だから、感謝の気持ちを忘れないということが大事だと私は思う。また、世界各地にはまだ戦争が終わってないところもある。その人達にもしてあげれることを探し、平和というものを作っていくことが今の私達にとって大事である。